



## 「異常気象と気候変動について わかっていること知らないこと」

筆保弘徳編，川瀬宏明編著，  
梶川義幸・高谷康太郎・堀 正岳・  
竹村俊彦・竹下 秀 著  
ベレ出版，2014年11月  
272頁，1,700円（本体価格）  
ISBN 978-4-86064-415-4

ニュース番組で，天気や天候の話題がトップニュースとして取り上げられる回数が，最近とみに増えている。もちろん，昨年の広島土砂災害など多くの人命を失った災害の場合は当然であるが，夏の熱雷による突然の雨，低気圧による強風，冬の地吹雪などは毎年起こる現象で，有り体に言えば特に珍しくもない。深刻かつ不幸な社会問題から人々の目を逸らしたいのか，あるいは〈お天気の話〉は最もクレームが来ない無難なニュースだからなのかはよくわからないが，違和感を抱くのは「初めての経験です」とか「これまで経験した事がない」等という（取材を受けた人の）コメントを伴って放映されることである。

視聴者はそれらを見聞きして「やはり異常気象が増えているのだ」と自分自身を納得させてしまう。更には個人レベルで簡単に動画が取れてしまうので，メディアを介してその様な荒天の映像を多くの人が目にし，また，昔は利用できなかったレーダー解析雨量や地方自治体・他官庁の（保守点検が行き届いていないかもしれない）雨量計のデータで1時間換算100 mmを超える雨が降った等と放映されると，一般の人が「極端な気象がこのまま増え続けていくとどうなってしまうのだろう」と疑心暗鬼になるのは仕方ない事かもしれない。

が，そこへ本書が登場した。

専門の教科書では慎重になってしまい正面切って取り扱うことが難しいテーマ，《異常気象と気候変動についてわかっていること知らないこと》がまさに本書のタイトルである。どこまでわかっているか，どこからがわかっているのか，きちんと私たちに教えようとする意気込みが伝わってくる。

読者は「あつ，このようなしくみで極端な気象になるのか」，「気候変動はこのように起こっているのか」，「日本の天気は地球規模の現象とつながっているんだ」

等々，多くの発見があるはずである。また，読み進めて行くうちに「本当に異常気象が増えているのか？」という疑問も持ち始めるかもしれない。「研究者でも正直に『わからない』と言っていることは一杯あるんだ」，「マスコミで言っている事は鵜呑みにしないぞ」と思うかもしれない。そして「自分も研究者を目指してみようかな」という気持ちが芽生えてくるかもしれない，そんな本でもある。

本書は6章で構成されているが，各章は新進気鋭の若手研究者が執筆しているだけあって，現在進行形の研究が臨場感をもって紹介されている。特に章末のコラムが充実していて，執筆者の熱意が伝わると同時に，研究者を目指す人への誘いにもなっている。

前半の内容のキーワードは編者によると〈テレコネクション〉であるが，〈波動〉と言い換えてもよいかもしれない。熱帯から，北極から，そして中緯度の西方から，東アジアへ波が伝わってくることで日本に極端な気象をもたらす様子が様々な観点から解説されている。若干説明が被っている箇所や，読者層を考えて難しい説明が出来ずに苦労している様子が散見されるが，そのような欠点が気にならないほど執筆者の個性が強烈である。

後半の内容は，〈物質〉輸送がキーワードとされているが，むしろ，温暖化に象徴される地球環境問題が主なテーマになっている。例えば，主に日本海で蒸発した水蒸気は相変化をして〈雪〉という形で日本に降ってくる。そこで生ずる「温暖化によって雪はどうなってしまうのだろうか」という素朴な疑問に，丁寧に答えてくれる。また越境汚染として最近とみに注目されているPM2.5に関しては，遠い大陸から日本へどのように飛来してくるのか，どこまで予測できそうか，これまでの知見をわかりやすく私達に教えてくれる。

本書の最後を飾るのは，成層圏オゾンと関連した太陽紫外線の研究である。オゾン層の破壊や温暖化との関連など，わかっているようで実はよくわかっていない事柄の指摘が新鮮である（欲を言えば，オゾンホールの話もあった方が良かったと思う）。

少々残念だったのは，異常気象や気候変動の研究内容を網羅することが本書の目的ではないとはいえ，〈雨〉の異常気象に関する記述がないことだ。これは姉妹書である前作《天気と気象についてわかっていること知らないこと》で既に取り上げたからであろう。その意味で，読者には是非，前作と本書の両方を読まれ

ることをお勧めしたい。また個人的なお勧めであるが、コラムの「レーダー画像に見えるドーナツの正体」も忘れずに読んで頂きたい。評者は学部低年次向けの講義の中で、気象学の〈ミステリーサークル〉としてしばしば話題に出すことがあるが、学生に尋ねる

とほとんど答えられない。「あっ、そうなのか！」という驚きの積み重ねが、気象学や気候学への好奇心に繋がっていくと信じている。

(九州大学大学院理学研究院 川村隆一)